

◇1998年度 浦野環境教育奨励金 活動報告

総合学習「食と環境」

聖学院中学校・高等学校 相澤 睦

1. はじめに

我々のいのちをつなぐ「食」。しかし、我々の口に入る食品とそれが生産されている現場とが、あまりにもかけ離れており、目の前にある食品がいのちある存在であったことを意識することができないのが現実ではないだろうか。さらに、大量に生産され消費され廃棄されている食品に対する価値観の貧しさを憂慮せざるにいられない。

そこで、様々な実体験を通して、コンビニやスーパーの店頭からは見えてこない食品の真の姿を浮き彫りにし、いのちある「食と環境」について深く考える契機とした。

2. 実践の形態

高校3年生の必修選択科目である総合学習から希望するものを履修する。毎年約12の講座が開設されるが、この実践は2年目の実践である。指導上と物理的理由から抽選の上、今年度は16名が受講した。また授業への取り組む姿勢・レポート等で評価をつけた。

3. 実践内容

我々のいのちを繋ぐものとしての食品。いのちを脅かす可能性のある食に関するもの（食品添加物や残留農薬など）。といった2つの切り口から授業を展開した。食物を実際に育てることにより、いのちあるものを育てる楽しさや苦勞・難しさ、そこにある様々な問題点を生徒自らが発見できるように心掛けた。

- ①野菜の栽培；10種類の野菜を苗から育て、その成長の様子を観察し収穫した。
- ②ニワトリの飼育；鶏舎を制作し、10羽のニワトリを若鶏から育て、採卵した。
- ③調理して食べる；身近な確実に食べられる野草を採集し、栽培した野菜と同様に天ぷらや漬け

物にして食べた。ニワトリの卵はゆで卵や卵焼きにし、肉は焼き鳥や唐揚げに、鶏がらはスープを取り、ラーメンを作って食べた。

- ④食品添加物調査；生徒にとっては生活の一部ともなっているコンビニの食品を近くの店から購入し、どんな食品添加物が含まれているのかを調べた。調査後に全て食べた。
- ⑤水質調査；我々を取り巻く水がどうなっているか、水質検査をした。各自の家庭の水道水・風呂の残り湯などの生活排水・近くの河川水を採水し、パックテストを実施した。
- ⑥研究；各自が興味のある環境問題に関する書籍を読み、レポートを提出した。

4. 実践結果（上記①～⑥に対処）

- ①不細工で、皮の厚い野菜。世話の仕方によっては枯死したり、結実しなかったりと思ったほど簡単ではないことに気付いたようである。しかし、味は、市販のものよりもしっかりとしていて美味しいという評価であった。
- ②雨水が吹き込んだ鶏舎の強烈な臭いや、時には弱い個体をつついて殺してしまうこともあるといった、動物を育てることには醜さをも伴うことを知った。また、苦勞して育てたニワトリを殺すときの葛藤や他の教師・生徒達からの非難、食べることへの躊躇など、様々なことを悩み、考えたようである。
- ③文句無しに、最高に盛り上がった時間であった。
- ④生徒達は、食品には意外と多くの添加物が使用されていることに驚き、今後買うときは気をつけたいと思うようになった。
- ⑤身の回りの水についても考えることができた。
- ⑥環境問題といっても様々なものがあることを知った。

以下に生徒の感想（抜粋）を挙げる。

- 最も印象に残ったのは、やはりニワトリである。世話をすることも想像以上に大変だったが、生きているニワトリをしめて食べることなど残酷

な気がして食べはしたが、直接殺すことはできなかった。今回、ニワトリを殺して食べる際に、一つの生命の重みを知ることができた。一度は皆、このような経験をし、食べることの重要性を知ってもらいたい。

- 「食」という行為は、毎日必ず行う、生きていく上で欠かせない行為だ。けれども、毎日食べ物があるのが当然で、食べ物がどのようにして作り出されているのかを考えたことはなかった。ものを食べるということは、何かの「命」が犠牲になるということを感じた。肉や魚を食べるということは、その過程で生きていた物が犠牲になっているということだ。この様々な生き物から「命」を与えられて人間が生きているということをしつかりと認識していくべきだ。
- 我々が生きていくためには食べなければならないし、動物の肉を食べるには豚や牛やニワトリ等を殺すのも仕方がないことであるが、動物はもちろん植物も人間と同じ生物である。我々が食べている物のほとんどが元は生き物であり、その一つ一つの命を奪って調理している。それを食べている私たちが、食事を残すということは、無駄に命を奪ったということになり、生物に対して非常に失礼である。だから、残さずに食べるということは、その生物に対するせめてもの償いでもあり、必要最低限のマナーでもある。
- 結局、ニワトリは三回ほどナタを振るうことによって頭を落とされたが、その時に感じた「命」については、一生忘れる事ができないだろう。頭を落とした後、数分間震えが僕を包んだが、それが僕の生きていくことの証明にもなった。

「食」というテーマでやってきたが、この授業は、「命」を学ぶ授業であったと思う。

- そして、実際ニワトリを殺すときになって、「かわいそう」という気持ちはもちろんあったが、それより今まで育ててきた生き物を「殺す」ということに抵抗を感じた。しかし結局は「生き物」は自分より弱い「生き物」を糧として生きていくものなのである。このニワトリの飼育ではとても大きなものを学んだと思う。
- 一つ自分が言いたい事は、毎年この授業を通して、食べ物のエグさと手間がこれだけかかるってことを、だんだん無知になっていく次世代にずっと見せてやって下さい。言いたい事って言うか、お願いみたいだが、それは本当に大切な何かをわからせることだと思う。とにかく、ずっと続けてやって下さい。自分みたいに考え方が変わる人間は絶対います。自分はもう卒業ですが、最後に何かいいものを得た気がする今日の頃です。

5. まとめ

この実践は、昼食以外に学校の中で食べ物が食べられるといった強い動機付けから始まったが、実際に育てたり、調理してみると並大抵のことではないということを身をもって知ったようである。特に、ニワトリの生と死との出会いを通して、店頭に並ぶ肉類がいのちあるものへと転化したことは大きな収穫であった。そしてさらに、自然界で培われた「食」全てがいのちあるものであり、我々は、そのいのちをいただきながら生かされているといった謙虚な態度が育てられたといえよう。